

万葉集原歌不明の歌について

——歌経標式から古今六帖まで——

渋谷 雄

平安・鎌倉・室町の各時代の文献には、数多くの万葉集の歌が載せられているが、その中に「万葉集に」とか、人麿・赤人等の万葉歌人の作とかの明記がありながら、現存の万葉集にはその歌が見当らない、所謂原歌不明の歌が多数存在するのに気付く。これは一体どうしたのであるうか。その中には万葉集の原文で書かれたものもある。万葉集の中に入れても決して異質とも思えないもの、何かの事情で万葉集に漏れたのではあるまいかとまで思われるものもある。もちろん、なかには誤謬その孫引き、またそのままの受け売りもある。室町時代頃のものには特にそれが多い。しかしこれらの中に、前者のような歌がたしかに存在しているようにも私には思え

る。以下この問題について考えてみたい。

さて、この問題について最初に触れられたのは、佐佐木信綱博士の「万葉集の研究―仙覚及び仙覚以前の研究―」（昭和十七年）で、博士は「仙覚抄前註釈書所載万葉歌」の項で、俊頼口伝・綺語抄・興義抄・和歌童蒙抄の各歌論書所載の万葉歌を万葉番号で示し、その後、「万葉集の明記ありて現存本万葉集に見えざる歌」として各一、一、二、一四首を掲げて居られる。但し論考はない。ついで山田孝雄博士の「万葉集と日本文芸」（昭和三十一年）では、「万葉集に名をかりたるもの」の一項を設けて論証されている。即ち、博士によれば、万葉集が古歌の集として尊まれ信ぜらるゝにつれて

往々名を万葉に借りて世の尊信を博せむとするもの、又は古歌なりと信ぜられつゝその出典の明かならぬものをば万葉にあるべきものと想像し、又は万葉に在りと主張したり、或はかく主張して人を欺き、若くは一時を糊塗して窮地をのがれたりすることの行はれたるを見る。

とある。ただこの博士の論拠資料は平安時代末の「奥義抄」一例と、「桐大桶」一例とで、他は江戸時代の「醒睡笑」「卯花園漫録」他の諸本で、これらをもってそのまま問題のすべてにあてはめるのは危険であろう。しかしこの考え方は大方の学者の支持が多い。私も時代が下るにつれて、特に室町時代頃からはこの傾向が著しいことは認める。しかし平安時代の勅撰集中のそれ、かなり信の置ける歌書中のものまでも、すべてこれで律して問題ないであろうか。いま一応考え直してみる必要があるように思えるのである。

そこでまず、本稿ではこの万葉集原歌不明歌として扱える歌が最初に見える、歌経標式、古今和歌集、後撰和歌集、古今和歌六帖の四文献中のそれを抜き出して考えて見ることから初めてみよう。

○歌経標式（日本歌学大系）

三首

- (1) 旨母我礼能 旨阨利夜那凝能 (山部赤人春歌)
 (2) 和我夜那疑 美止利能伊止爾 那留麻呂爾 美那具宇礼太美 伊氣呂俱美阨利 (鏡女王諷去春歌)
 (3) 阿岐夜麻能 母美知婆自牟留 旨羅都由能 伊知旨侶岐麻呂 伊母爾阿婆努可母 (長田王恋婦歌)

他に、その歌人が万葉集に見えないものの歌が七首ばかりあるが、ここでは扱えない。

○古今和歌集（古今集成立論）

七首

- (1) 題しらず * 諸本の校異（右傍書）は主要なものに止める。
 よみ人しらず

我やどの池の藤波さきにけり山郭公いつかきなかむ

このうた、ある人のいはく、柿本人麿が也。歌上

- (2) (卷三夏135番) (題しらず) (よみ人しらず)

夜を寒み衣かりがねなくなへに萩のしたばもうつろ

ひにけり

この哥は、ある人のいはく、柿本人まろがなりと (卷四秋211番)

- (3) (題しらず) (よみ人しらず)

梅花なごそれとも見えず久かたのあまぎる雪のなべてふ

れ、ば

この哥、ある人のいはく、柿本の人丸が哥なり

(巻六冬334番)

(4) (題しらず)

(よみ人しらず)

ほのくとかあかしの浦のあさ霧に嶋がくれ行舟をし
ぞおもふ

この哥は、あの人のいはく、柿本人麿が哥也

(巻九旅409番)

(5) (題しらず)

(よみ人しらず)

あはぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへともにつけぬ
べき物をかな

この哥は、ある人のいはく、柿本人麿が歌也

(巻十三恋621番)

(6)

よみ人しらず

風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬ
べらなり

この歌は、ある人のいはく、柿本人麿がナシなり

(同 671番)

(7)

(よみ人しらず)

梓弓いそべの小松たが世にかよろづよかねてたねを
まきけん

この哥は、ある人のいはく、柿本の人まろが歌
也 (巻十七雜907番)

このほか、同じく左註に「或人のいはく」として、
「ならのみかど」「近江のうねめ」「高津のみこ」等の作
とするものが、七首ほどあるが、これらを万葉歌人と決
することを得ないので、ここでは扱わない。

○後撰和歌集 (小松茂美著 後撰集校本と研究)

一首

(1) 題しらず

天智天皇御製

秋の田の仮庵の庵のたまを粗み我が衣手は露に濡れ
つつ (巻六秋302番)

* この歌、古今六帖第二にも見ゆ。

○古今和歌六帖 (図書寮叢刊)

二九首

* 作者が万葉歌人名のものに限る。

* その他、古今集にも見えるものは後掲。

(1)

人丸

けふありてあす、きな、ん神無月時雨にまかふ紅葉
かささん (第一198番)

(2)

人丸

ことこのみあふとはいひてくらはしのみねのしら雲
たつたひにけり (第一519番)

- (3) さほ山にたなひく雲のたゆたひは思ふ心をいまそさ
たむる(第一533番) 人まろ
- (4) わきもこにわれこふらくは春山にたなひく雲のたゆ
る日もなし(第一534番) おなし
- (5) わかせこかいるさの山のやまあらきてなとりふれそ
かもまさなるかに(第二8番) 大伴良女
- (6) 雲のうへに雁ぞ鳴なるうねひ山みかきはらに紅葉
すらしも(第二21番) たちまのわう女
(人まろ) 塵ほになし
- (7) 山とり
雲のゐるとを山鳥のよそにてもありとしきけはわひ
つゝそぬる(第二95番)
- (8) なにしおへはいつれもかなしあさなくなておほ
しうなひこかはら(第二208番) 山のうへのをくら
やかもち
- (9) おもひいてこひしくもあるかあはつの小萩か下
にわかゆきしかり(第二372番) 木の女わう
- (10) ひたくみふりぬいたまもあるものをいつの露そや
袖にもりつく(第二439番) さみませい
- (11) みつのえのうらしまのこかつり舟もおなしうらにそ
三とせこくてふ(第三367番) さかのうへのらう女
- (12) わかせこかおもかけやまのさか井まにわれのみこひ
て見ぬはねたしも(第四91番) (おりまのわうじ)
- (13) ありてみるものにしあらねとくさまくらたひにしき
けはかなしかりけり(第四40番) 人まろ
- (14) むすふてのいしまをせはみおくやまのいはかきしみ
つあかすもある哉(第五50番) ひとまろ
- (15) あひおもはぬいもをなにせんむはたまのひとよも夢
にみえもこなくに(第五103番) 人まろ
- (16) ころみにおもひしものをあきやまのはつもみちは
のいろにいてにけり(第五160番) 人丸
- (17) 山ナ一本しろのかまふけのをにふすかのあさふしかねて人

にしらるゝ(第五162番)

(18) ひとりね

人まろ

かさゝきのはねにしもふりさむきよをひとりやわか

ねん君まぢかねて(第五173番)

(19)

人丸

あひみすてとしはへにけりあやしくもいもほこひす

てあひわたるかも(第五251番)

(20)

人丸

春雨にころものそてはひちぬらんいかいゑちの山

はこえなん(第五265番)

(21)

人丸

ひとりしてものをおもへはすへをなみゆけともいも

にあふときもなし(第五505番)

(22)

人丸

梅のはなさきてちりぬとしらぬかもいまゝていもか

いてゝあひみぬ(第五511番)

(23)

ひとまろ

のちつゐにあはすもなりぬいもをゝきてつまはさた

めしこひてしぬとも(第五566番)

(24)

かさの女郎

わかせこおもかけ山のさかさまにわれのみこひて

みぬはねたしも(第五576番)

(25)

人丸

おくやまのしけいりにたちてまとふともいもをむす

ひしひもをとかめや(第五819番)

(26)

人丸

かくこひんものとしりせはあつさゆみすゑのなかと

ろあひみてましを(第五900番)

(27)

人丸

さくらはなこつたひちらすうくひすのうつし心もわ

かおもはななくに(第六688番)

(28)

人丸

あやしくもきなかぬかりかしら露のおきにしあさは

ひさしき物を(第六814番)

(29)

山くちの女らう

しほかまのまへにうきたるうきしまのうきておもひ

のあるよ也けり(第三344番)

——この歌は後の新古今集恋五¹³⁷⁸にも「中納言家持に遣し

ける 山口女王」として、万葉集617番の歌と共に二首の贈

歌となつて見えている。

他に、古今集に見えて「読人しらず」とあるのに、こ

の古今六帖では作者を「人まろ」「家持」としている歌

が五首。

(30) わかやとにいなおほせ鳥のなくなへにけさぶく風

に鷹はきにけり 人まろ (古今四秋上208、古今六帖二
303)

(31) わかやとの板井門合の清水里とをみ人しくまねは水草
おひにけり やかもち (古今二十大歌所御哥 1079、古今
六帖二512)

(32) いたつらにゆきてはきぬるものゆへにみまほし
さにいさなはれつゝ 人丸 作者不審 (古今十三恋三

620、古今六帖五510) (伊勢物語にもあり)

(33) あさちふのおのを(古)のを(古)しのはらしのふれとも人知るらめといまはしら
しなや(古)とふ人なしに(古) 人丸 (古今十一恋一505、古今六帖

六553)

(34) 春かすみかすみみていにしかりかねはいまぞ鳴なる
秋霧のうへに 人丸 (古今四秋上210、古今六帖六813)

ほかに、既掲古今集の(5) (六帖二693)、(4) (六帖三366)、

(6) (六帖六570)、(1) (六帖六693) の四首が重出している
が、略す。

まず歌経標式の三首についてであるが、これには二一
首の万葉歌人の作が見え、うちこの三首が万葉原歌不明
歌となっている。本書の成立は諸家(1)すべて万葉集成成立以
前とされ、これは特殊仮名遣い使用例からも問題あるま

い。たゞ人麿を(ここには出ないが)「柿本若子」として
いるが(他に、「大伴志賣夜若子」ともある)、これは万葉集

にも見える「等能乃和久胡」「久米能若子」と同じく、
年若い男に対するほめことばで、これもそれと同じと見

てよく、「歌経標式」の拠った資料がこの様になってい
て、その為と見てよいであろう。(これについて、伝誦歌

所引説(2)もあるが、見る通りの正確なる原文表記、また作者表記
も見られ、この説はとれない)従ってこの三首も、この若き

人麿の頃の、即ち、万葉集以前の古い資料からのもので、
万葉集には何かの事情でとり入れられなかったものであ

ろう。要するに、万葉集にも流入したのである。万葉集時
代以前の、原万葉集ともいうべき資料の存在を、これら

は物語っていると、左様に私には考えられるのである。
次に、古今和歌集のそれについてであるが、この問題

を正面からとり組まれたのは大久間喜一郎氏(3)で、氏によ
れば、これは「ある人はいはく」とある通り、「口頭によ

る伝承歌」で、(6)の「べらなり」など平安初期の語であ
って、人麿時代の作ではなく、結局「何ら謂れがない」

ものとされる。はたしてそうであろうか。いやしくも漢
文・仮名の両序まで持つ勅撰集の、当時最高權威的歌集

に於いて、そのようないいかげんな口頭のみ伝誦歌
を、わざわざ「柿本人麿」と左註までもつけて撰び入れ

るであろうか。どうも私には疑問に思えてならない。

第一この註は、他の誰でもない撰者の中の誰か一人か、少なくともこれを肯定した撰者の一人でなければならぬ。しかもその人は万葉集にかなり(当時なりに)通じていて、この七首が万葉集にはないと承知しているものとなろう。すると、この条件をみたす者は誰であろう、貫之自身なのではあるまいか。当時貫之は万葉集に通じた者の一人で、彼自身には万葉の詞を詠み込んだ歌もあり、また彼の著作の「新撰和歌」にも万葉歌をかなり挿入している。その上、彼の古今集仮名序の「万えふしふにいらぬふるきうた」を撰ぶとするその見識といい、「かきのもとの人まろなむうたのひじりなりける」の評言といい、またこれら左註のある歌は、著名な万葉歌人としては人麿のみであることといい、結局この左註の「ある人」とは貫之(?)を措いてほかに考えられないように思えるであろうか。即ち、貫之(?)はわが国最初の勅撰集たる古今和歌集を、歌集として権威のあるものとするため、「おほきみつのくらる」の、「うたのひじり」人麿を抜きにすることの物足りなさを感じ、しかも古今集仮名序にもさしきわることのないように、この左註という形式をとって、万葉集にはない人麿歌をわざわざ挿入したのではあるまいか。

尚、その資料は、さきの歌経標式と同じく、万葉集以前ないし万葉頃の、恐らく万葉集の歌も混在している原資料からであったであろう。その理由は一つ、同じく左註のある歌に、万葉集に見える歌が一首(巻十三「いぬかみの」の歌万葉二七一〇番、但し墨滅歌)、次のような万葉集とほぼ同一の歌と見られるもの二首(巻十四)とが、見えることである。(片仮名傍訓が万葉集)

カフチメ 夏びきのてびきのいとをくり返しことしげくともた
エ へヤ ヽむとおもふな(万葉卷七、一三一六番)

この哥は(ある人、あめのみかどの、あふみのうねめにたまひける)返しよみて奉りけるとなん

たえず行あすかの川のよどみなば心ありとや人のお
マクニ ムはむ(万葉卷七、一三七九番)

この哥、ある人のいはく、なかとみのあづま人が哥也

ただ、これには右の通り訓に少異が存する。諸家はこれをもって直ちに口誦によるものとされるが、それもなかにはあるであろうが、他の理由も考えられるのではあるまいか。それは時代のやや下る平安中期の元暦本万葉集の訓に於てさえ、かの有名な持統天皇の御歌を

春過ぎて夏ぞきぬらし白妙の衣かはかるあまのかご
やま(万葉卷一、二八番)

と訓んで居り、万葉卷四、六二二番の歌でも

草枕旅にひさしくなりぬればいもを ナヲコソオモヘナコヒ
ソワキモ ソワキモ おもふこふな
ソワキモ ソワキモ (片仮名傍訓が万葉諸本の訓)

となつて異なつていたのである。即ち、これら原資料は、やはり、原文表記であつたはずで、それを当時の漢字読解力でもつて、かなりあて推量に訓むわけで、少異はもちろんのこと、不用意にも、(3)「なべて」・(6)「べらなり」などの平安通行の歌語も、訓として施されることもなるであらう。むしろこの方が自然なのではあるまいか。(なお(4)の「ほのぼのと」の歌は、後代に有名となり、いろいろの伝説が付加されてきたが、もちろんここでは問題とはなるまい。)

また、これら七首は歌風からしても万葉集に入れてさして異質ではないのではあるまいか、やや古今風に近いかも知れないが。即ち、万葉集の編者は、これらはやや万葉の流風から下るものとして万葉集に撰入しなかつたのかもしれない。すでに武田祐吉博士⁽⁴⁾

万葉集の編者は、その所有の資料を処理し編纂することに依つて、万葉集を成立させた。……その資料の処理に當つては、まず取捨の撰択が為された。と述べて居られる。

これを要するに、この七首は、さきの歌経標式の三首の場合と同じく、万葉以前ないし万葉頃の万葉歌の混在

する原資料からのもので、万葉集編者からは捨てられた歌、それを改めて貫之(?)が撰び、古今集に左註を付けて入れた、この様に私には考えられるのである。

次に、後撰集の歌に一首があるが、これは作者「天智天皇」が、写本によつては「あめのみかど」とあり、確實に万葉歌人の万葉原歌不明歌とするには、やや問題がのこるので、これはこのままに置き、直ちに、次の古今和歌六帖のそれに入ることとする。

古今六帖に収められている万葉歌については諸説がある。万葉集を傍に置いてのもの、(古点時代の万葉の訓み)、⁽⁵⁾ 仮字万葉から派生したある本からのもの、⁽⁷⁾ 伝承歌が必ずふくまれたもの等、⁽⁸⁾ それである。ついで竹下豊氏の所論⁽⁹⁾ では、

六帖の成立時期……十世紀の末頃に流布していたのは……仮名本の万葉集抄だつたらう。それからさらに派生した類書などもあつたに違いない。六帖はこれらの、歌人たちの間に流布していたものを採歌資料とした。

と。これは従来の説を一步進めたものとして、十分肯定出来るものと思う。そこで私はこの説にさらに以下の二点を付け加えておきたい。その一つは、この原歌不明歌二九首の所在を調べてみると、次の様になつてゐること

である。

(注) (i) (2)は既掲原歌不明歌の通し番号、以下同様。(ii) 517は古今六帖の歌番号、以下同じ。(iii) (243)は万葉歌番号、以下同じ。(iv) 519?はここで問題としている原歌不明歌番号。

(723)	(20)	(17)	(566)	(3406)	7	533	(2)
569	262	158	436	(11)	(291)	?	517
(2609)	(3131)	(2268)	(500)	365	8	534	(243)
570	263	159	437	(272)	?	?	518
(2822)	(3981)	(116)	(275)	366	9	(5)	(242)
571	264	160	438	(古今)	(1097)	1	519
(1211)	(287)	161	(634)	367	(7)	(1247)	?
(24)	265	(3023)	439	?	95	2	520
↓	?	162	(142)	368	?	(1093)	(1923)
574	266	?	440	(2748)	96	3	(3)
(2284)	(700)	163	?	369	(2802)	(1332)	(4)
575	(23)	(1570)	(14)	(351)	(10)	4	530
(539)	566	(18)	49	(701)	439	(2239)	(2332)
576	?	173	(50)	?	?	5	531
?	567	?	?	434	(3400)	(1333)	(1760)
577	(2605)	174	(16)	(1161)	440	6	532
(2465)	568	(1981)		435	441	(1213)	(2816)

第一くも

第二山

山より

第三ふね

第四たひ

第五はしめてあへる

人にしらるる

ひとりね

とほみちへたてたる

わかもち

わかせこ

わかせこ

即ち、これら大半 (①⑥) ほか一〇首を除くが、他の万葉歌とひと続きとなっていて、その中の一首ないし二首となっていることである。即ちこれは、何かしら題によって部類された、そのひとかたまりの中から採った為ではないかということである。これは万葉歌の所出に於ても同様で、同一歌題下三首連続の所出のところ七〇ヶ所、四首は二三、五首は一六、六首は一一、七首以上の所は一四ヶ所にも及んでいる。中には同一歌題下すべて万葉歌で占められ、

第六 歌題 つけはき 四首 (万葉 1262) 56・4152・4481。

同 歌題 すけ一一首 (万葉 2837) 580・1905・2470・2472・2757・2758・2761・791

1250 (3064)

第六かり ゆみ

578 (656) (26) ↓ 900? 901 (289) (28) ↓ 814? 815 (2134)。

などというのものもある。すると、竹下氏の言われる「仮名本の万葉集抄」は、実は部類されたもので、それに拠った為ではないか。他方古今六帖の編者がこのように部類していったともとれるが、これは見られる通り、万葉歌の配列が前後区々で、とても万葉集中からそれを取り彼をとるという煩は出来ないのではあるまいか。それに、

部類された本としては、古くは山上憶良の「類聚歌林」があったし、万葉集巻十・十一も部類されているし、後には「類聚古集」「古葉略類聚抄」もある。事実これら部類された本は平安朝人にとって歌作にも大いに便利であったろう。結局、古今六帖の編者は、「仮名本の万葉集抄」（これは部類されていた）を傍に置いてそれに古今集の資料をも加えながら、採歌編纂していったと見るのが自然なのではあるまいかと思える。

その二は、この「仮名本の万葉集抄」は、その原資料は万葉集からだけのものではなく、さらに、これまでの二書の場合と同じく、万葉頃・万葉以前の原資料からも流れてきているものであったであろう。でなければこの原歌不明歌二九首の説明がつかない。また従って作者と歌との入れちがい等、諸家指摘の所謂杜撰と一見見えるものも生じて来ようし、むしろそれが自然とも言えるであろうということである。蛇足ながら付言しておく。

以上を要するに、歌経標式、古今集・古今六帖中の万葉原歌不明歌は、万葉以前ないし万葉集頃の、万葉歌混在の原資料に拠った為のもので、歌経標式はその原資料そのままを、古今集はこれを仮名に訓み下したそれを、古今六帖はさらにこれから流出した仮名本の部類された

万葉集抄から、それぞれ採歌したのである。即ち、これをさらにまとめれば、万葉集をふくめての、現存しない諸資料を総合した、より広い『万葉圈』とでもいうべきものが設定され、それらからこれらは出て来たものと言い得るのではあるまいかということである。

注(1) 久松潜一「万葉研究史」、大久保正「古代萬葉研究史稿」

(2) 迫徹朗「王朝文学の考証的研究」所収（昭和四十八年三月）

(3) 大久間喜一郎「古代文学の構想―万葉集の世界」(昭和四十六年一月)

(4) 武田祐吉「万葉集校定の研究」(昭和二十四年九月)

(5) 上田英夫「万葉集訓点の史的研究」(昭和三十一年九月)

(6) 山田孝雄「萬葉集と古今六帖」(「万葉」第三号)

(7) 後藤利雄「人麿の歌集とその成立」(昭和三十六年一月)

(8) 老川義治「古今和歌六帖と万葉集」、大久保正「万葉の伝統」、平井卓郎「古今和歌六帖の研究」所収（昭和三十九年一月）

(9) 中西進「古今六帖の万葉歌」(昭和三十九年六月)